堕天使の祝福

オレッち

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

沼津という海辺に面した田舎町で輝きを見せた９人の少女たちがいた。

彼女たちはキラキラと輝きを見せ沼津の希望の星となった。

彼女たちは輝きを求め、ただがむしゃらに駆け抜けていき、その大きな翼を広げ羽ばたき飛び立つことが出来たのだ。

また同じ頃、沼津にはもう１人の希望の星がいた。

その１人もまたキラキラと輝き、彼女たちと同じように希望の星と呼ばれていた。

彼女たちと同じように大きな翼を広げ飛び立ったのだ。

だが、１人の希望の星は一瞬で消えた。

飛び立った鳥の右翼が折れ落下したのだ。
真っ逆さまに落下し地面に叩きつけられた鳥は起き上がれなかった。
ただただ広がる大空を見つめる事しか出来なかった。
そして、その大空さえも見ることを辞めてしまった。
この話は、そんな折れた翼をもつ少年と輝き羽ばたいた９人の少女たちの物語である。

作者より
皆さん初めまして、オレッちと申します。
この作品はｐｉｘｉｖにて投稿していた物を当サイトでも投稿する事にしました。
駄文で読みにくいかと思いますが、宜しくお願い致します。

目次

第１話：出会い ―――― 1
第２話：ヨハネちゃんだよね!? ―― 6
第３話：レンち～ ―――― 12
第４話：見つめる顔 ―――― 19
第５話：希望の星 ―――― 28
第６話：無駄じゃ無いわよ！ ―― 36
第７話：皆の期待 ―――― 46
第８話：おかえり ―――― 54
第９話：見に来て欲しい ―――― 62
第１０話：何よ、カッコいいじゃない 70
１１話：互いの想い ―――― 81

第1話：出会い

――――――・・・

暑い夏の日だった。
汗が滴る額に頬から顎へと伝いポタポタと地面へと落ちる。
夏なのだから当たり前だ。
だがこの汗はただ暑いからだけでは無かったのはよく分かっていた。
ふと見上げると雲ひとつない真っ青な空が広がるが、そんな事はどうでも良かった。
誰か人の声が何度も飛び交うと視界の中に人影が飛び込んで来た。
何か大声で呼び掛けているが聞こえない。
だが次第にその声は鮮明に耳へと入って来た。
「だ…か?!」
聞こえない
「だい…ぶ…か?!」
まだ聞こえない
「おい！大丈夫か?!」

やっと聞こえた男性の声に反応すると他にも何人も男性が覗き込むが、みんなの表情は強張っており中には絶望にも似た表情をする者もいる。

「…が…ない」

「おい！どうした!?」

「肘が…動かない!!」

――――――・・・

バッと起き上がった少年は汗だくだった。

最悪最低の夢を見ていたからだ。

「最悪だ…」

そう呟きながらベッドから起き上がる少年の顔は幼く見え、また背丈もそう高くは無い。

その少年の名は橘 廉（たちばなれん）

静岡県沼津市に住む少年である。

と言っても年齢は１５歳と高校１年生であり少年と言うにはもう遅い歳であろうか。

橘廉（※以降より廉）はスマフォの時間を見るとまだ６：００と出ており、しかも今日は日曜日である。

普通ならゆっくりと寝ていたい所であるが、この最悪な目覚めで二度寝は無理と判断したのだろう廉は運動できる服装へと着替えをするとスマフォだけを持ち外へと出てランニングへと向かう。

家から出て南の方へ向かおうと思いひたすら南の方角へと走る。

大きな橋を渡り大きな道を永遠と降って行く事約１時間は経ったであろうか、廉の目の前には海が広がった。

沼津港以外にもこんな海辺の見える場所があったのかと地元に住みながら普段行かない場所へ足を運んだ廉は何処か心が落ち着き走り続けていると神社の鳥居が見えてきた。

「こんな所に…しかもこの階段…」

と目の前に広がる長く連なった階段を目にすると廉は迷わず駆け上がる。

これは良いトレーニングになるなと思いながら乱れぬペースで階段を駆け登ると頂上には小さな社が建っていた。

「はぁ…はぁ…」

社を見た廉は取り敢えず手を合わせお参りする。

お参りをしたら周りをキョロキョロ見回し探索を始めた。

すると社の裏側にボロボロになったバットが落ちており廉はそれを拾い上げる。

「ボロボロ…ずっと置いてあったのかな」
とグリップ部分のテープがボロボロで所々少し凹んでいるバットを手にしながら呟くと、彼はおもむろに素振りを始めた。
ビュッ!ビュッ!と鋭い音を立てながら素振りをする廉。
(久しぶりに振ったな…もう少しやってくか)
と素振りを続けていると、先ほど廉が上がってきた階段の方から声が聞こえてきた。
「果南ちゃん待って〜」
「千歌達が遅すぎるの〜」
「果南ちゃんが速すぎるんだよ〜」
「ほらもう少しで頂上…あれ?」
そう言いながら階段から体半分ほど見えた所で紫色の髪でロングポニテの女の子が立ち止まる。
それに続いて何人かの女の子達が追い付くと立ち止まる彼女に聞く。
「どうしたの?立ち止まって?」
「ん〜、どうやら先客がいるみたい」
と指を指す彼女の先には素振りをしている廉がいた。
「わ!男の子だ!」

とオレンジ髪でシャツには大きく片仮名のチの字が入った女の子が言うと廉が声に気付き素振りを止めると声の方向へと振り返る。

「あ…」

そうポツリと呟き彼女達と目が合う廉。

この偶然の出来事が、この橘廉と彼女達の物語の始まりであった。

次回へ続く

第2話：ヨハネちゃんだよね!?

目が合う廉と彼女達。
廉は彼女達の格好を見て此処で何かするのだろうと理解した。
「あ、ゴメン君達の練習場だったのかな?あ、このバットも使ってたの?ゴメン借りちゃってた」
と慌てて話す廉に彼女達はポカンとする。
何か変な事言っちゃったのかな?と自分の発言を頭の中で整理していると、先頭にいたロングポニテの女の子が話す。
「ううん。そのバットは私達のじゃ無いから良いけど…えっと、君は?」
「あ、あぁ。俺の名前は橘廉と言います」
と廉は敬語で話した。
見た感じ年上かな?と感じたのもそうだが、取り敢えず敬語で話しとけみたいな感じである。
「廉君だって。女の子みたいで可愛いね♪」
と話したのはオレンジ髪の女の子。

　廉自身はこの名前で女の子みたいと揶揄われた少し苦い経験があるが、悪気は無いのだろうと思い廉は苦笑いをして見せる。
「千歌ちゃん。それは幾ら何でも失礼だよ」
「でも曜ちゃん」
「でもじゃなくて」
「はぁい。ゴメンなさい～」
「いや、俺は全然大丈夫だから」
　とオレンジ髪の女の子の隣にいた緑の髪の女の子が叱り謝らせ、廉は少し驚いた様に手を振りながら言う。
　すると今度は女の子達が自己紹介を始めた。
「私は松浦果南。浦の星女学院の三年生」
「私は高海千歌。二年生だよ♪」
「私は渡辺曜。千歌ちゃんと同じ二年生だよ」
　と３人の女の子の自己紹介が終わると、何やら再び下から複数の声が聞こえてきた。
「あぁ。他にもメンバーがいてね。お～い」
「もう花丸さんは…もう少し速く走れませんの?!」
「無理ずら～。走るのは苦手ずら～」

「あれ？千歌ちゃん達何してるの～？」
と話し声が近づいて来ると、６人の女の子達が次々と上がって来た。
これには流石に廉も驚き思わず後ずさりしてしまう。
「全く、ずら丸はいつまで経っても走るのはダメね。これじゃあリトルデーモン失格よ？」
「ずらぁ～」
と話す片方にお団子が着いた女の子が疲れてへばっているロングヘアの女の子に対しボヤきながらため息を吐く。
すると、廉がその光景を見るとハッと何かを感じた様に見入る。
「ねぇ!!君、ヨハネちゃんだよね?!」
「だから!よし…ん?!あ、合ってる!!…って貴方誰よ？」
思わず発した廉の言葉。
その場にいる彼女らは驚いた様に廉とヨハネを交互に見る。
「…は?!いやいや私知らないけど?!」
と慌ててブンブンと手を横に降るお団子頭の女の子に他の女の子達はニヤニヤと近づく。
「ちょっと～、どういう関係～？」

「ｏｈ、ボーイフレンドですネ～♩」
と先ほど自己紹介してくれた松浦果南（以降より果南）と金髪で変わった髪型をしている女の子がヨハネと呼ばれた女の子の両側に立ち聞く。
「いや、知らないってば！」
と慌てながら顔を赤らめる女の子。
すると後ろにいた高海千歌（以降より千歌）と渡辺曜（以降より曜）所に黒髪で美少女と言える女の子が近づき話しかける。
「千歌ちゃんどういう状況？」
「う～ん。私にも何が何だか…」
と腕を組みながら考える千歌に曜は指を顎に当てながら話す。
「２人昔の知り合い…とか？」
「でも善子ちゃん知らない感じだけど？」
と話す３人に対し、まだ押し合い圧し合いする果南ら３人。
すると廉の所へ黒髪でパッツンヘアの女の子がズイッと迫って来る。
「あなた！」
「はい、何でしょう？」
物凄い威圧に怖気つく廉。

その女の子は人差し指を廉の目線に合わせる様に指すと話し出した。
「アイドルは恋愛は禁止です!!貴方が誰だかは知りませんが、善子さんはアイドルですわ!」
「ええ?ええ?!いや恋愛て…」
とズイズイ来る女の子に後ずさりする廉。
すると廉はボンと何かにぶつかり振り返ると其処にはミニツインテの女の子がいた。
「ゴメン大丈夫?!」
とその女の子の両肩を軽く掴む廉。
本人は至って真面目にどこか怪我とか痛めた場所は無いかと思っての行動であったのだが
「あ…」
「ずら…」
と何人かの女の子が耳を手で塞ぐ。
するとミニツインテの女の子の顔が見る見るうちに赤くなって来ると…
「ピギィイイイイイイ!!!」
「わぁあああ!」
と絶叫する女の子に驚く廉と耳を塞いでいなかった他の女の子達。

「ルビィちゃんは究極の人見知りずら。特に男の人は」
「耳が…」
と頭がクラクラしながら立つ廉。
ルビィと呼ばれた女の子の絶叫により取り敢えずこの場は落ち着いた為、詳しい話をする事にしたのであった。
次回へ続く

第3話：レンち～

「それで、橘・・・廉さんでしたっけ？」
「はい・・・」
と先ほど迫られていた女性、黒澤ダイヤ(くろさわだいや)の前に正座させられている廉。
また彼の周りにも他の女性らも取り囲むように集まっている。
「先ほどはすみませんでした。初対面の方にああいう行動をとってしまい」
「い、いえいえ。大丈夫です」
謝るダイヤに手を横にブンブンと振りながら話す廉。
「それで、善子さんとはどういう関係ですの？」
「だからヨハネだってば！」
とダイヤの言葉にツッコミを入れるのは先ほど廉が驚きながら話しかけたお団子の髪型が特徴の津島善子(つしまよしこ)もとい、津島ヨハネ。
その彼女のツッコミをスルーしつつ廉は話し出した。
「ヨハ…善子ちゃんとは小学校の時の同級生です」
「なんで言い換えたの…え？」

「あれ？覚えてない？ほら近所で良く遊んだでしょ？」
と話す廉にヨハネは廉を見ながら過去の記憶を思い起こしていた。
だが彼女は思い出せない。
「ええっと…」
「善子ちゃん覚えてないずら？」
と隣で聞いてくる語尾に方言をつけて話す女性は国木田花丸（くにきだはなまる）。
ヨハネと同い年の一年生である。
また花丸の隣にいる先ほど廉とぶつかり叫び声を挙げた女性の名は黒澤ルビイ（くろさわるびぃ）。
ヨハネや花丸と同じ一年生で、ダイヤの妹だ。
「まぁ小学校でも４年生くらいから遊ばなくなっちゃったしなぁ。よく川辺で走ってたんだけど。レンち～って言って」
と話す廉。
その言葉にヨハネはピンと来た。
「レン…ち～…あぁ!!レンち～！チビのレンち～だ！」
「チビは余計だよチビは…」
と思い出したヨハネに対し苦笑いを見せながら話す廉。

「うわ懐かしい…ってか、なんで突然遊びにも来なくなったのよ？」
「あぁ、まぁ色々あってね～」
と苦笑いを浮かべながら話す廉にヨハネは〝ま、良いけど〟と言って問い詰めるのを止める。
「ＯＨ～、ボーイフレンドではないのデスか～」
と残念そうに話すのは小原鞠莉。
金髪の髪でスタイルの良い三年生である。
「だから違うってば！」
「でもぉ、当時はそういう感情があったりしてぇ～」
と話しながらヨハネに絡む鞠莉に対しヨハネは引きはがそうとしながら怒る。
「当時でも無いわよ！」
「んふふ～、そういう事にしときましょ♪」
と言いヨハネから離れる鞠莉。
するとダイヤがふとある疑問を廉にぶつける。
「でも何で、廉さんは善子さんの事をヨハネと言いましたの？」
「あぁ、その時からずっとヨハネヨハネって言ってて、俺最初本当にヨハネって名前だと思ってたんだよね。でも学校で聞いたら善子って名前でしょ？でもまぁ、ヨハネで慣れ

ちゃってたから」
「フッ。流石はレンち～…いえ、我がリトルデーモンといった所かしら。」
「そういうのはいいずら」
「ちょっと!?何でよ!?」
　と話をぶった切る花丸に怒りながらツッコミを入れるヨハネ。
　このやり取りを見て廉は笑う。
「でもまさか、ヨハネちゃんがＡｑｏｕｒｓに入ってるなんて…見て似てるなぁとは思ってたけど」
「あれ？私たちの事知らない感じ？」
「知らない訳ではないけど、詳しくは無いんだよね。友達とかが見たりしてるのをを横で聴いたりとか。なんか申し訳ない…」
　と千歌の言葉に申し訳なさそうに話す廉。
　彼自身は興味が無いわけでは無いのだが、周りの人の話やネットニュース等で知っている程度である。
「なるほど。善子さんとの関係の事は分かりました。では、何故貴方は此処に？」
「あぁ、朝早く起きたもんでランニングに来たんです。それで此の場所が気になって上がったんです。そしてここに落ちてたバットで素振りしてたら丁度…」

「えっと、ここまではどうやって来たんですの？」
「え？走ってです」
「えっと…家はどの辺？」
「ちょうどリバーサイドから少し南に行った所ですね」
と話す廉。
彼女たちは頭の中で簡単に計算した。
「まさか…走って此処まで来たと？」
「ええ。俺も此処来るの初めてだったので海がキレイでした」
と笑顔で話す廉に彼女たちは驚いた。
（え？走って…来たの?!）
（ここまで!?）
（千歌ちゃんあの時どの位時間かかった?!）
（私あの時自転車だから分かんない!!）
とコソコソと話す彼女たちに廉は？マークを頭の上に出しながら首を傾げる。
「へぇ～君結構走れるんだね～。気持ちいよね～」
「ですよね！なんか清々しかったです」
と意気投合しだすのは果南。

そんな二人を見て他のメンバーはこう思ったであろう。
（男版果南ちゃん…）
しばらく和気あいあいと話すが、廉は徐にスマフォを取り出すと時間は８時を過ぎており廉は慌てて立ち上がる。
「ヤバッ！じゃあ俺は行きます。練習の邪魔しちゃってゴメン」
と言いながら走りだそうとする廉に千歌が呼び止める。
「もし時間とか都合着いたら。ここに来てもいいよ～。」
「でも迷惑じゃ」
「ううん。そんなこと無いよレンち～。ね、善子ちゃん♪」
「な、何で私に聞くのよぉ?!」
「え～、だって～」
とニヤニヤと笑いながら話す千歌にヨハネは不機嫌そうにするも、少し恥ずかしそうに言う。
「ま、まぁ。別に良いけど…」
「…ありがとう♪じゃあまた来るね」
と言い手を振りながら階段を降りていく廉。
その廉の後姿を彼女たちは手を振りながら見送るのであった。

「さ、私たちも練習再開ししよっか」
と言う千歌。
「あれ？果南ちゃん？」
と果南がジッと廉を見つめていくことに気づいた曜が問いかけると、果南は顎の下に手をやりながら話した。
「ん～…どっかで見た事あるなぁ…廉君」
「女の子にいそうだよね～」
「もう千歌。そういうんじゃ無くて…でも何処かで見たような…」
と話す果南だが、思い出せない為練習へと戻っていくのであった。

次回へ続く

第４話：見つめる顔

Ａｑｕｏｒｓのメンバー達と別れてから廉は毎日とは言えないが、ちょいちょい顔を出していた。

特に何をする訳でもなく、メンバーのダンス練習を見たり、一緒に階段を上るトレーニングをしたりする。

また打ち解けてきたのか廉の口調も変わり上級生に対してもくだけた話し方になった。

特に、歳が同じ一年生組とは仲が良くなっておりよく４人で話をしているのが目立つ。

「よっちゃん」

「…む～…」

「何？」

「ヨハネ」

「え？」

「ヨハネって言ってるでしょ?!最初の方はヨハネって言ってたのに何で変わってるのよ

!?」
「え～、だって皆が善子ちゃんとか、よっちゃんって言うから」
「私はヨ～ハ～ネ～!!」
「善子ちゃんは善子ちゃんずら」
「む～」
とむくれるヨハネに笑う廉達。
そんな和気あいあいとしている中、果南は難しい顔をしながら廉を見ており、ダイヤが気づくと果南に話しかける。
「どうしましたの?そんな難しい顔をして」
「分かった!果南ちゃんヤキモチ妬いてるんだ!」
「違うよ千歌～」
と千歌の頬を摘みながら話す果南。
どうやら先日の事が気になっていた様で、廉の顔を見ながらどうにか思い出そうとしていても思い出せないでいたのだ。
「あーもう!直接聞く!」
と言いながら廉の元へと向かう果南。
廉の前に立つ果南に廉はギョッとする。

「えっと…何か？」
「廉君さ…私どこかで見た気がするんだよね…」
とジト目で話す果南に廉はドキリとする。
少しであるが表情に変化が出た。
「えぇっと…よくいる顔だと思うけど？」
「ん～…違うんだよなぁ～」
とマジマジと見る果南に廉は冷や汗を流しながら後ずさりをする。
「ほら果南さん。廉さんが後ろに下がってるではありませんか。お止めになっては？」
「ん～、でも気になるんだよね～」
とダイヤに止められ、ようやく廉から離れるがどこか納得いってない様子だ。
廉は苦笑いを見せていると、ヨハネがスマフォの画面を見ながら言う。
「あ！もう終バス！」
「え?!ホントに?!」
とヨハネの言葉に驚く曜。
また廉も帰る方角が同じなので一緒に大急ぎで帰りの支度をする。
「じゃあ皆またね！今度行けたら行くから!!」

とヨハネ、曜の後に続き走り出す廉。
他のメンバーに別れを告げて3人は大急ぎで船に乗り対岸へと渡り最寄りのバス停へと到着した。
「間に合った…」
と肩で息をしながらバス停へと着く3人。
ベンチに座りながら待っている中、曜は廉に対して話しかける。
「そう言えばレン君って、何か運動やってるの?」
「え?」
「だってさ、初めて会った時も此処まで走ってきたって言ってたでしょ?そんな事出来る位だから何かスポーツやってるのかなって?」
と話す曜に廉は黙ってしまう。
首を傾げる曜は「どうしたの?」「何かあるの?」と聞いてくるも廉は黙ったままである。
すると、ヨハネが話に割り込んでくる。
「それ以上は良いんじゃない?言いたくないみたいだし」
「善子ちゃん…」
「人間、言いたくない事の1つや2つあるわよ」

と話すヨハネに曜はそれ以上の追及は止める。
そして途中のバス停で曜が降り二人と別れを告げる。
「じゃあね！」
「またね～」
と手を振りながら曜を見送る廉とヨハネの二人。
バスが動き出し揺られていると、廉が話し出す。
「ありがとね」
「え？」
「さっき止めてくれて。お陰で助かったよ」
「え、えぇ…別に…良いけど」
と突然お礼を言われて顔を赤らめながら照れるヨハネ。
彼女はふと隣にいる廉を見ると、そのままジッと見つめてしまった。
初めて会った時から蘇ってくる当時の思い出と今の廉。
（昔は私より背が小さかった筈なのに、男の子って大きくなるんだな…まぁ今も私より少し高い位だけどね。でもこうして見ると…）
とジッと見てしまいヨハネに廉は視線を感じたのかヨハネの方を向く。
「どうしたの？何か付いてた？」

「え?!ううん!!!?」

と慌てて首を横に振るヨハネ。

見てしまっていたことに気づかれた恥ずかしさと見てしまっていた事への恥ずかしさに顔を赤らめるヨハネ。

二人が降りるバス停へと着き、降りると廉はヨハネの家とは逆の方を指さしながら言う。

「じゃあ俺はこっちだから」

「あ、うん」

「?どうしたの?」

「べ、別に何でも無いわよ?じゃあね!」

と言い走り出すヨハネに首を傾げる廉。

走りながらマンションへと入っていくヨハネはエレベーターに乗ると、扉の窓に映る自分を見ながら呟く。

「どうしたんだろう、堕天使ヨハネとあろう者が…今まで気にもしてなかったのに…今日あんなに見ちゃって…あぁもう!」

とゴンと扉に頭を当てるヨハネ。

「明日には忘れなさい!これは違うんだから!ヨハネしっかりしなさいよね!」

と自分に言い聞かせるように呟くヨハネ。
降りる階に着き扉が開くとヨハネはそのまま自分の家へと入っていく。
ボフンと自分のベッドに倒れこむと、枕に顔を埋めながら先ほどの廉の表情が脳裏に写り、掻き消すという行動を繰り返すのであった。

それから数日が経ち廉はコンビニでヨハネ達と共にいた。
外の駐車場で飲み物を飲みながら話している廉と千歌達。
「それでね～」
と楽しそうに千歌が話をしているのを遠くでジト目で見つめるヨハネ。
「善子ちゃんどうしたの?」
と話しかけるルビィに花丸はニヤニヤしながら言う。
「ルビィちゃん。これはヤキモチずら♪」
「ち、違うわよ!?」
「あ～・・・」
と花丸の話に納得するルビィと慌てて否定するヨハネ。
そしてルビィはヨハネの肩にポンと手を置きながら笑顔で言う。
「善子ちゃん。頑張ルビィだよ!」

「だから違うわ…」
と否定をしようとした時、離れた所から大きな男の声が聞こえた。
「やっと見つけたぞ廉!!」
「え?!誰?また男キャラ?」
と声の方向を向きながら話すヨハネ。
声のした方向には、白い野球用のユニフォームを着た男性が立っており廉の名前を叫んでいた。
「聞いた通りだった…おい廉!」
と言いながら寄る男性に廉は顔を引きつりながら睨みつける。
そしてその光景を見ていた果南が大きな声を出す。
「あぁ!!」
「ど、どうしましたの?果南さん?」
「ｏｈ!?忘れ物デスか?」
と隣にいたダイヤと鞠莉が驚くも、果南は気にせずに言う。
「思い出した!!廉君の事!!」

その言葉に、その場にいた全員が注目する。

そして廉は果南の言葉に固まる。

次回へ続く

第5話：希望の星

「思い出した!!」
そう叫んだのは果南。
廉は果南の言葉に固まってしまう。
「思い出した？」
「そうだよダイヤ。廉君の事！夏テレビでお父さんやお客さんの見てたの思い出したんだよ！橘廉君、君は聖秀学園高等学校の野球部に所属していたんだね」
そう言いながら廉を見る果南に固まっていた廉は彼女に目を合わせずにコクリと頷いた。
「聖秀学園…どこかで聞いたような…」
「そう言えば千歌ちゃんの旅館にあったスポーツ新聞で…」
顎に指をあてながら思い出そうとする曜と同じように思い出そうとしながら話す梨子。
すると、花丸がポンと手を叩きながら話す。
「あ。お父さんが新聞見ながら言ってたずら。甲子園？に出たって」

その花丸の言葉にビクッとする廉。
「そう。橘廉君はね、今年の夏に高校野球の選手、しかも一年生エースとして甲子園に出た子なんだよ」
『え～!!??』
「えっと…甲子園って何？」
と驚いた皆の中で一人だけ千歌は？マークを頭の上に出しながら傾げると周りはズッコケる。
「ち、千歌ちゃん？」
「知らないの？甲子園」
と千歌に話す梨子と曜。
千歌は本当に知らないらしく簡単に甲子園について話を二人はする。
「それって凄い事じゃん!!」
「だから最初から言ってるんだけど…」
「あはは、千歌ちゃんらしいや」
と一人遅れて驚く千歌に苦笑いを見せる梨子と曜。
だが、廉はあまり良い表情をしていない。
「レンち～、凄いんだね！」

「あ、いや、まぁ…」
と切れの悪い返事をする廉に千歌は首を傾げる。
普通なら自慢してもいい事だ。
一年生で、しかもエースとして甲子園の土を踏むとなったら大変光栄な事である。
だが廉の表情からは苦痛というより虚しささえ見える。
「レンちー?」
彼の表情を見て不安そうに感じるヨハネ。
千歌も彼の異変に感じたのか、彼に聞いてみる。
「レン君、何かあったの?」
「いや、なんでもないよ…」
と立ち上がる廉はそのまま去ろうとすると、先ほどの少年が呼び止める。
「おい廉!!逃げるな!」
強い口調で呼び止める少年。
廉は背を向けたまま止まる。
「戻ってこいよ、皆待ってるぞ」
「俺は…」
少年の呼びかけに廉は言葉を詰まらせる。

そして彼は振り向くと、その顔はとても悲しく、寂しそうにしていた。
「もう野球はやらない。そう決めたんだ。だから…もう関わらないでくれ」
そう言い残し去ってしまう廉。
少年は頭を掻きながら表情を歪ませる。
「クソッ…」
「あの…」
「え?.あぁゴメンいきなり…って、Ａｑｕｏｒｓ?!」
とその少年は廉の時とは違い彼女たちを見て驚く。

「あ、君は知ってるんだ」
「知ってるも何も沼津の有名人だよ?!アイツ、知り合いだったのかよ。あ、凄いファンです!!」
と話す少年に彼女たちは照れる。
有名人という言葉に対しく感じない者はいない。
そこで彼女たちは気になった。
「ねぇ、レンちーの事なんだけど」
「あぁ、アイツ何も言ってないのか」

「そうだねぇ、そう言えば聞いた事無いかな？」
「というより、あまり自分の事話して無かったしねぇ」
と口々に話す彼女たち。
「そう言えば、君の名前は？」
「あ、あぁ。俺は工藤洸毅（くどう　こうき）」
その少年の名は工藤洸毅。
聞けば廉と同じ一年生で彼もまた一年生ながらレギュラーを取った選手である事が分かった。
「それで、洸毅さん。廉さんは、どうしてああいうことを？」
とダイヤが聴くと洸毅は少し黙るが、頭を掻きながら口を開く。
「アイツ、廉は一年生で聖秀の一年生エースになった。俺もショートとしてレギュラーも貰えたけど、でもアイツは一年どころか部内で誰よりも秀でていたよ。」
と話し出す洸毅。
廉は一年生エースとして夏の予選を1人投げ切った。
高校は決して強いチームではなく予選ベスト16が最高だったチームをこの夏、見事甲子園へと導いたのである。
また甲子園では勢い止まらずベスト16まで勝ち上がるなど、彼の名前は一時新聞の

一面を飾る出来事となった。
また地元沼津市も彼の活躍を称賛し、沼津としても久しぶりの甲子園出場。
そして初のベスト１６と、彼の事をこう呼んだ。

〝希望の星〟と…

「でも、この活躍の裏にアイツは爆弾を抱えてました」
「バ、爆弾？」
と洸毅の言葉にギョッとしながら聞き返すヨハネ。
洸毅は笑いながら自分の腕を上げ見せながら話す。
「肘だよ。アイツはこの夏の連投による投球過多で肘をやっちまったんだ。医者の診断結果は…もう投手は出来ない」
その洸毅の言葉を聞いた彼女たちは、一瞬で表情が固まった。
スポーツ選手にとって怪我はついて回るものだが、野球選手、特に投手にとって肘の故障は最悪選手生命にも関わる事だ。
それを彼は高校一年生にして〝投手失格〟の烙印を押されてしまったのである。
「やりたいのに出来ない…一番キツい事だよね」

と呟くのは果南。
理由は違えどスクールアイドルを一度は諦めた彼女から出た言葉は他の皆の心に突き刺さる。
「それで、洸毅さんは廉さんを何故連れ戻しに？」
と聞くのはダイヤ。
洸毅はダイヤの顔を見ながら話す。
「アイツには、戻って貰わなきゃいけないんです。口ではあんな事言ってるけど、多分心の何処かで…」
と話しながらギュッと拳を握る洸毅。
するとダイヤが口を開く。
「でも、連れ戻すのが本当によろしい事なんでしょうか？」
「え？」
「私は、廉さんの気持ち分かりますわ。今まで楽しくてしょうがなかった事が、突然手放されてしまった。そんな状況で戻れと言われて戻れますでしょうか？」
ダイヤの言葉に洸毅は言葉を詰まらせた。
何も言えないかった。
「でも、俺は諦めないです…」

そう言いながら去る洸毅。
彼の背中を見ながらダイヤはハァッとため息を吐きながら言う。
「ホント、男の子って面倒ですわね…さぁ、私たちも帰りましょう」
と言い彼女たちも帰ろうとする中、ヨハネは1人何かを考えているようだった。

次回へ続く。

第６話：無駄じゃ無いわよ！

あの一件から、廉は来なくなってしまった。
Ａｑｕｏｒｓのメンバーも心配そうにしており何処か彼女達も練習に身が入らないようだ。
「ねぇ善子ちゃん」
「ヨハネよ！」
「そういうのは良いずら」
「え・・・」
休憩中にやり取りをする花丸とヨハネ。
「廉君と何か連絡あった？」
「ないわね」
「本当に？」
「本当よ」
「ふ～ん」
「な、何よその目は～」

ジーッとジト目で見つめる花丸に顔を引きつりながら答えるヨハネ。
何かを知ってると踏んだヨハネはさらに問い詰める。
「マルに内緒事はダメずら」
「べ、別に内緒事なんて・・・」
「目が泳いでるずら」
「うぐぐ・・・」
分かり易い位に目が泳ぎ何かを隠しているのがバレバレのヨハネに花丸は分かっていた。
おそらく廉と何かしらの連絡を取っているのだろう。
そう感じていたのだ。
「で、どうなんずら？」
「あぁ～・・・。まぁ正直な所、連絡は取り合ってるけど。前の事は聞いてないんだよね」
「えぇ～？」
「な、なによ？」
「善子ちゃん・・・使えないずら」
「な、なんでそうなるのよ～！」
ため息を吐きながら言う花丸に怒るヨハネ。

花丸はクスクスと笑いながらヨハネを見る。
「冗談ずら」
「冗談そうには見えなかったけど・・・・」
「でも、心配ずら」
「う、まぁ・・・うん」
黙ってしまう二人。
彼女達もこれ以上の事は無闇に頭を突っ込んではいけないのでは?と言う思いが出てきておりなんとも言えない感情が漂う。
「善子ちゃん、心配ずら?」
「べ、別にそんな」
「心配ずら?」
「・・・うん。そうよ?悪い?」
「悪くないよ?むしろ安心ずら。善子ちゃんが心配してくれて」
「どう言う意味よ?」
「秘密ずら」
花丸の言葉に首を傾げるヨハネ。
続けて花丸が話を始める。

「今度、会ってみてくれるずら？」
「え？誰と？」
「廉君と」
「誰が？」
「善子ちゃん」
その言葉にヨハネの顔が赤くなる。
二人きりで会うのかと聞き返すと花丸は深く頷く。
ヨハネは困惑しながらもスマフォを取り出しメッセージを打つと、返事は意外とすぐに返ってきた。
「どうだった？」
「・・・ＯＫだって」
「善子ちゃん。グッジョブずら！」
「いやいや・・・ズラ丸も来るでしょ？」
「勿論、行かないずら」
「なんでよぉ?!」
「これは、善子ちゃんだけで行くずら♩」
笑顔で話す花丸にガックシと項垂れるヨハネ。

「てか、何着てけば良いのよ～」
「普段の格好で・・・オシャレしていくずら」
「なんで今間が空いたのよ～!?」
「気にしないずら♩」
「も～!!」
時は流れ数日後の休日。
自宅のあるマンションの下でヨハネが待っていた。
服装はスカートに白いTシャツ、そして上は黒のジャケットを着ており、どこか気恥ずかしそうに時間を気にしながら待つ。
「てか遅い・・・何やってるのよ～！」
プンプンと怒りながら待つヨハネ。
するとヨハネの後ろから廉の声が聞こえる。
「ゴメンお待たせ」
「あ・・・うん、大丈夫・・・って普通の格好かい！」
廉の声を聞いて先ほどの怒りが消え辿々しい返事をしながら振り返るヨハネだが、廉の着て着たTシャツにズボンの格好に怒る。
「少しはオシャレしなさいよ～！」

「ええ、だって俺わかんないし」
「もう、私がバカみたいじゃない！」
「ええ～・・・」
再び怒り出すヨハネを宥める廉。
冷静になったのか二人は歩き始めた。
「・・・」
「・・・」
沈黙が続く二人。
廉にしてもヨハネにしても、どう話しかけていいのか分からないようだ。
そんな沈黙の時間が続きながらも仲見世通りへとやって来る。
「えっと・・・何処か行きたいとことかある？」
「え、ええっと・・・適当に」
「適当に・・・」
「そ、そうよ悪い?!」
「いや、別に」
顔を真っ赤にしながら答えるヨハネに廉はビックリしながら言う。
それから二人は仲見世の目についたお店を見て回る。

雑貨屋に行ったり服屋に入ったりとしているうちに二人の緊張感が無くなったのか、少しずつ笑顔になって来る。
「あったぁ～」
「それぇ・・・凄いね」
寄った仲見世にある大きな書店に寄ると、ヨハネは探していたのか『堕天使大辞典』と書かれた厚い本を手に取り目を輝かせる。
レジに並ぶヨハネを横目に廉は、とある分厚い本を手に取るとペラペラと捲りながら中を確認する。
「レンち～どうしたの？」
「あぁ、これさゲームのルールブック？みたいなんだけど、なんか分厚くて高い・・・」
「あぁそれねぇ。結構人気あるわよ？」
「へぇ、そうなんだ。買ってみようかな」
そんな話をしながら廉がフイっとヨハネの方を見ると二人の目が合った。
ジッと長く目が合う二人は、互いに顔を赤らめ目を反らすと廉は先ほど手に取った本を持ちながら
「お、俺はこの本買って来るよ！」
「う、うん！いいんじゃない!?」

急ぎ足でレジへと向かう廉。
ヨハネは心臓がバクバクと打ちながら惚けていた。
（また見ちゃったじゃない！）
（目すごい見ちゃった・・・よっちゃんって、あんな綺麗な目してたんだ）
互いにドキドキしながら書店から出る二人。
落ち着かせる為か、二人はそのまま書店の少し北に行った所にある喫茶店へと入る。
「はぁ～、コーヒー美味しい」
「フッフッフッ、この堕天使ヨハネの供物である。このチョコレートパフェを今食さん！」
「あはは、相変わらずだね」
「う、ウルサイわね！」
喫茶店で笑いながらゆっくりとする二人。
しばらく何気無い話をしているが、ヨハネは頃合いと見たのか話を始める。
「あのさ、前の事なんだけど」
「え？あ、あぁ・・・」
先日の事を話し出すヨハネ。
廉は明らかに表情が強張り出す。

「えっと、私ね、レンち～が野球してたの知らなかったの。それで、まさか甲子園だっけ？そんな凄い所に出てるなんて思わなかった」
「うん、ありがと」
「でも・・・その、肘」
「あぁ・・・バカみたいでしょ？」
「え？」
「一生懸命やって来たのにさ。こんなバカな結果になってさ。本当、何やってんだろ・・・こんな無駄な事を」
「無駄じゃないわよ！」
「よ、よっちゃん？」
　大きな声が響く。
　驚く廉と他のお客さんだが、ヨハネは構わず続ける。
「無駄なんて言わないでよ！私だって、こんな堕天使とか・・・無駄で辞めたいと思ってた、でも・・・皆んなが、そんな私で良いって言ってくれたの。無駄な事なんてないわよ！」
「よっちゃん・・・でも、俺はもう肘が」
「肘が何よ!!いつまでもグジグジ！それでも貴方、私のリトルデーモン?!」

「リ、リトルデーモン・・・」
「堕天使ヨハネのリトルデーモンなら！シャンとしなさいよ!!」
そう語気を強めるヨハネの目には涙が浮かんでいた。
彼女の涙は、廉に対しての涙である事はすぐに分かった。
廉に対して涙を浮かべてくれる彼女を、彼はその瞬間から友達や幼馴染とは別の、違う感情がフツフツと湧き上がっていた。
また同時にヨハネも廉に対しての感情が違くなっていた。
（あぁ・・・俺、よっちゃんが・・・）
（私、レンち～の事が・・・）
《好きなのかも》

次回へ続く。

第7話：皆の期待

「わ、分かったから。だから座って座って」
「あ、ゴメン」
立ち上がり涙目になるヨハネに廉が諭すように座らせ、ヨハネも冷静になりこの状況に気づいたようで恥ずかしそうに座る。
沈黙が再び起こる。
「よっちゃん」
「ヨハネよ・・・って、何？」
「ありがとう」
「え？」
「何かさ、涙目になりながら怒ってくれるのを見て、嬉しかった」
笑顔を見せながら話す廉。
そんな彼をヨハネはジッと見つめると、彼女も優しい笑顔を見せる。
「当たり前よ。リトルデーモンが悲しんでいる姿は見たくないわ。特に、私にとって特別な・・・リトルデーモンだから・・・ね」

　その言葉を聞き廉は少し時間が止まっていたが顔を赤くする。
「あ、いや！そういうんじゃないんだからね!!」
「え!?あ、あぁ!!だよね～!!」
　言った事に理解したヨハネも顔を赤くしながら言い、廉も同調し二人で笑い合う。
　喫茶店から出る二人は、最初に比べたら会話も自然と出来ている。
「そういえばさ、レンち～ってピッチャーっていうんだっけ？やってたんだよね？」
「まぁ、そうだね」
「テレビとかネットとかでしか見た事ないんだけどさ、１５０キロとか投げれるの？」
「いやぁ１５０は無理かなぁ～・俺出ても１３０キロ後半だし」
「ふ～ん・・・良く分からない」
「でしょうねぇ～」
　ヨハネの言葉に苦笑いを見せながら話す廉。
「よっちゃんはさ、スクールアイドルは楽しい？」
「ん～、そうねぇ。楽しいわよ？それに、世界中に私ヨハネのリトルデーモンが増えるんだもの♪クックックッ・・・」
「楽しそうだね・・・」
「あ～、何よその反応～。バカにしてるでしょ～」

「してないしてないよ～・・・」
「嘘つきなさいよ！明らかにバカにしてるでしょその顔！」
顔を引きつりぎこちない笑顔を見せる廉にツッコミを入れるヨハネ。
「・・あはは♩」
「もう！・・・あはは♩」
可笑しくなったのか笑う二人。
するとその時、仲見世に大きな声が響いた。
「ドロボー!!誰か!!」
聞こえたのは駅側の方角。
廉とヨハネが声のした方向を見ると、二人の隣を自転車が通り過ぎる。
目で追う廉、その自転車に乗っていた男性の手には女性物のバックが握られており、すぐに引ったくりである事が分かる。
「おら！どけぇ!!」
人が行き交う通りの真ん中を突っ切るように走る自転車に通行人は逃げるようにどく。
「え!?引ったくり!?」
「ちょっと持ってて」

「え？」
ヨハネが驚きながら言う。
すると、表情が変わった廉はヨハネに書店で購入した本の入った紙袋と貴重品の入ったバックを預けると体全体に力を入れるようにスタートを切った。
「え?!追いかけるの!?」
相手は自転車。
普通の足なら到底追い付く事はない。
そう、普通の足なら。
「はっはぁ!このまま逃げ切れば・・・」
半分ほどまで走っていた自転車の男性は余裕そうな表情をしながらスピードを緩めながらチラリと後ろを見る。
するとなんと、人ごみを上手く避けるように全速力で向かってくる少年、廉の姿があった。
廉とすれ違ったのは駅側の仲見世入り口付近、自転車はコインパーキングがある付近を通過した所まで来ていた。
「えぇ?!」
気づけばあと数メートル程の所まで来ている廉に自転車の男性は驚き、自転車のペダ

ルに力を入れる。
「は、速!!」
「おぉ～、あの子は聖秀の橘か」
「え?おじさん知ってるの?」
廉のスピードに唖然とするヨハネ。
その隣で感心したように中年ほどの男性が話すのをヨハネは聞き返す。
「知ってるの何も、沼津じゃ有名人だよ。肘を壊して心配してたが、あの様子じゃあ大丈夫そうだな」
「えっとレンち・・・、橘君はピッチャーじゃあ」
「あぁ、お嬢ちゃん野球知らない感じかな」
「あ、はい詳しくは」
「確かに、橘は投手として優秀な才能を持っていたよ。でもな、彼の力は投手だけじゃあないんだよ。打者としても一年生ながら1番投手を打つなど、最近じゃあ珍しい選手だったな。その1番の武器は・・・あの走力だな」

人ごみを紙一重で避けながら追いかける廉。
その姿に焦りながら自転車のスピードを上げようとする男性だが、ペダルに力を入れ

た瞬間に後ろにグイッと何かに力強く引かれる。
「逃げんなよ、泥棒さん」
「な!!??」
　廉が追いついた。
　自転車の後方部分にある荷物などを括り付ける荷台に手がガッシリと掴まれていた。
「ママチャリじゃあ、そんなスピード出ないでしょ～、マウンテンバイクとかさ～」
「い、いやいや!!ママチャリでも追い付く方がどうかしてるよ!!」
「え～?そうかな?でも、お縄につくんだね」
　そんなやり取りをしているうちに警察の人が到着。
　自転車の男性は連行され、カバンは女性の元へと無事戻された。
「ありがとうございます」
「いえいえ」
　何度も頭を下げお礼を言う女性に廉は恥ずかしそうにしながら言う。
　すると周りの人から声がかけられた。
「聖秀の橘君だろ?もう怪我はいいのか?」
「え?あ、はい」
「そうかぁ～。また甲子園目指して頑張ってくれよ!」

「え、あ・・・」
「期待してるぞ！」
　廉に向けられた声がけに廉は少し困惑していた。
　彼がテレビで姿が映されたのは記憶に新しいとはいえ、まさかここまでとは廉自身思ってもいなかった。
（皆・・・覚えててくれてた・・・しかも心配まで・・・）
　トボトボとヨハネの元へと戻る廉。
　するとヨハネは目を輝かせながら廉に話す。
「レンち～凄いのね♪」
「あ、あはは・・・まぁそれほどでも・・・あるかなぁ、なんて♪」
「でも、良かったわね。皆から心配されてて」
「あ～、うん。そうだね・・・」
　頬をポリポリと掻きながら照れる廉。
　すると廉は真面目な顔になるとヨハネに言う。
「明日から、Ａｑｕｏｒｓの皆の所に顔出すよ。」
「レンち～」
「そんで、ケジメつける」

「ケジメ？」
「うん。やっぱり俺には野球しかない。でも・・・投手が俺の全てなんだ・・・多分皆からマウンドで投げる姿を期待されてると思うんだ」
「レンち～・・・」
「皆の期待に応えられない・・・だから・・・」

野球は出来ない。
その言葉を聞いたヨハネは、とても悲しい表情をしていた。

次回へ続く。

第８話：おかえり

翌日、廉はＡｑｕｏｒｓのメンバーが練習している所へやってきた。
久しぶりの再会に喜ぶメンバー達。
だが、廉から語られた言葉に表情が曇る。
「え?!野球を辞める?」
「はい」
「そうなんだ・・・」
廉からの言葉に驚くも果南は言葉短かに納得したように言う。
「レンち～、それでいいの!?」
千歌がズイッと詰め寄りながら廉に言う。
「諦めるの!?それで本当にいいの!?」
「千歌ちゃん・・・」
千歌の言葉に隣で呟く曜。
以前、千歌に諦めるかを聞いた時、諦めないと答えた彼女の事を知っていた曜。
千歌の気持ちは曜によく分かっていた。

だからこそ、千歌は廉に対して諦めないでほしいと言う思いが出たのである。
「ごめんチカっち・・・俺は投手しか出来ないんだ・・・」
「レンち～・・・ダメだよそんなんじゃあ!!」
廉の肩を揺らしながら必死に言う千歌。
その様子を見て梨子と曜が止めに入る。
「チカちゃん。やめなよ」
「やめないよ!だって悲しいじゃん!」
「しょうがないよ。廉君は肘の故障で」
そんなやり取りをする千歌達の後ろで悲しそうな顔をするヨハネ。
ヨハネの事に気付いた花丸とルビィは両側に寄り添うように並ぶ。
「ゴメン、私じゃあ無理だったみたい」
「善子ちゃん・・・」
「そんな事ないずら。廉君を此処に連れてきただけでも十分ずら」
「ズラ丸」
「それに、後は・・・男同士の問題ずら」
「え?」
ニッと笑みを浮かべて話す花丸に首を傾げるヨハネ。

「そうだぜ廉!!」
「あ・・・洸毅」
　その場に現れたのは洸毅。
　洸毅は廉の元へとやってくると胸ぐらを掴む。
「野球を辞めるだと?」
「あぁ、俺には投手しか出来ない。それ以外は・・・」
「馬鹿野郎!!」
　廉が言い切る前に洸毅の拳が廉の頬を殴り飛ばした。
　勢いよく飛ばされ転げる廉。
「れ、廉君!!」
　殴られた廉に近くにいた果南が慌てて起き上がらせる。
「だ、大丈夫?」
「ちょっと工藤さん!?殴ることはないのでは!?」
　洸毅に対し怒るダイヤ。
「いいんです。此奴はこの位やらなきゃ!」
「イッテェ～・・・テメェ!!」
　頬を摩りながら起き上がると廉はすぐさま応戦し、洸毅を左手で殴りかかる。

殴り合いの喧嘩に発展してしまった廉と洸毅。
彼女達はどうにも出来ず慌てふためく。
「ちょ、ちょっと止めなよ！」
止めようとする曜。
他のメンバーもどうにか止めに入り二人を引き剥がす。
「もう俺に構うなよ!!俺はもう野球できないんだよ！もう良いんだよ!!」
「アホか・・・野球できない奴が!!利き手とは逆の手でしか殴らないのかよ!!」
「!!」
「何が野球はどうでも良いだ！じゃあなんで利き手を気にするんだよ！最初の一発目から左で殴ってたよな・・・」
「それは・・・」
「やっぱりさ・・・未練あるよなぁ。お前、本当に野球好きだもんな。」
「あぁ・・・俺は野球が好きだよ！それに改めて気付いたのは前の日曜日・・・」
そう言いながらチラリとヨハネを見る廉。
「でも・・・俺もうピッチャーは・・・この肘じゃあ・・・」
右肘を押さえながら言う廉。
すると洸毅はハァッと大きくため息を吐く。

「ホンット！お前面倒くせぇ程うじうじしてんな!!ほらよ!!」
そう言いながら洸毅は持ってきていたバッグから何かを取り出すと廉に向けて放り投げる。
「わっわっ！」
放り投げられた物を地面に落ちる前に受け取る廉。
手に取った物を見ると、それはユニフォームだった。
英語で【ＳＥＩＳＨＵ】と書かれたユニフォームを見る廉、そして裏返すとそこには６の文字が書かれた背番号が縫い付けられていた。
「これ・・・」
「１番ショート!!」
「え？」
「１番ショート橘廉！これからはお前はこのポジションだよ」
洸毅からの言葉にポカンとする廉。
勿論、他のメンバーもこの展開にポカンとする。
「え？でも俺は野球・・・」
「アホ！野球は投手だけじゃねぇだろ！前にお前の診察受けてた先生に聞いた。お前は肘をやってから投手としての選手生命は絶望だと言われたが、野手をやったりするのは

問題ないそうじゃねぇか。だからチームの皆と話し合って決めたんだ。この背番号６を付けて、グラウンドに戻ってこい廉！」
「洸毅・・・」
「帰ってこいよ・・・廉」
　そう言いながら手を差し伸べる洸毅。
　その洸毅の手に、廉は目に浮かべた涙をグイッと拭うとガッチリと手を掴む。
「ホント何やってたんだろうな俺・・・」
「ホントだよ。馬鹿レンめ」
「はぁ・・・ただいま」
「はいよ、おかえり」
　そう言い固く握手を交わす二人。
　その二人に、周りにいたＡｑｕｏｒｓのメンバーは感動し涙を流しながら拍手をしていた。
「良かったねぇ～よがったねぇ～」
「これが男の子なんだね・・・」
　涙を流しながら感動する千歌と曜。
　ダイヤもうっすらと涙を浮かべながら

「ホント、男の子って面倒ですわね」
「まぁこのくらいが可愛いよ」
「ｏｈ～♩友情ってやつね♩」
涙を流しながら感動する彼女達に恥ずかしそうにする廉と洸毅。
洸毅は帰っていき、廉はと言うと最初に殴られた時に口の中を切っていた為、千歌の家で治療をすることになった。
「はい、染みるよ～」
「いっつ!!」
曜が傷口に消毒をし痛がる廉。
すると花丸が廉に話をする。
「でも良かったずら。廉君がもう一度野球を始めるずら」
「あはは・・・慣れてないポジションだけどね」
「ルビィ応援するから」
「私も～♩」
「勿論私たちもね♩」
花丸、ルビィに続き千歌と曜も言う。
廉は恥ずかしそうに照れていると、ヨハネの方を見るとヨハネはビクッとする。

「あれれ～？善子ちゃんはどうずら～？」
「愛しの廉君が頑張るんだよ～」
花丸と曜がヨハネの両隣に行き挟む。
ヨハネは顔を真っ赤にしながらも廉を見ながら言う。
「わ、私も・・・その、応援・・・してる、から」
「聞こえないずら～」
「応援してるわよ～！」
大きな声で言うヨハネに廉はニコッと笑顔を見せる
「ありがと♩よっちゃん♩」
「う、うん・・・ってヨハネよ!!」
笑い合う廉たち。
殴られ痛い思いをしたが、廉はやっと自分の場所へと戻ることが出来たのであった。

次回へ続く。

第９話：見に来て欲しい

あの日から、廉はＡｑｕｏｒｓの練習に顔を出さなくなった。
勿論今回はいい意味である。
再び野球の世界へと戻ることの出来た廉を、彼女たちは快く送り出した訳であるが一人の少女は少し違っていた。
「はいワンツーワンツー！」
果南がパンパンと手を叩きながらタイミングを取りながらダンスの練習をする。
しばらくして休憩をとる。
座ったり、立ったりとしながら飲み物を口に含む彼女たち。
「はぁ・・・」
そんな中、ヨハネは壁に寄りかかる様に座り小さくため息をついていた。
「善子ちゃん♩」
「だからヨハネよ！・・・何よズラ丸」
ヨハネの隣に座ってくるのは花丸。
ペットボトルの飲み物を飲むヨハネに花丸はニヤニヤしながら言う。

「廉くんの事、気になってるずら?」
「ぶっ!!??」
花丸の言葉に思わず口に含んだ飲み物を吹き出してしまうヨハネ。
「ゲホッ!ゲホッ!・・・ななななんでよ!?」
「バレバレずら。練習中もボーッとしてるし」
「べっ!別にそんな・・・事は・・・あぁ・・・」
言い訳をしようとするヨハネだが、次第に声が小さくなる。
その光景に花丸はニヤニヤする。
「妬いちゃうずら」
「何よそれぇ」
「善子ちゃんが心配してる事にずら」
「だから別に心配なんか・・・まぁ少しはしてるけど」
「素直になったね善子ちゃん」
「だからヨハネだってば!」
ヨハネの反応を見て面白そうに笑う花丸。
「もう!」と怒りながら飲み物を口に含むヨハネ。
「あれから連絡とか取り合ってないの?」

「たまにかな・・・向こうも練習で忙しいみたいだし」
　廉はどうにか遅れを取り戻すためにもう練習の日々を過ごしている様で、ヨハネとも夜に少ししか連絡を取り合っていないらしい。
「まぁ頑張ってるみたいだしぃ？いいんじゃない？」
「惚気ずら♩」
「ち、違うわよ！」
「善子ちゃんが怒った～♩」
「もう～！ズラ丸～！」
　そんなやりとりをする二人。
　その二人にルビィが近寄る。
「何話してるのぉ？」
「善子ちゃんの惚気を聞いてるずら♩」
「そうなんだぁ～ルビィも聞きたいなぁ♩」
「だから違うってばぁ！」
　３人でワチャワチャしながらじゃれ合う。
「あ～３人で何楽しそうな事してるの～？」
　そこに千歌も加わり収集がつかなくなりつつある中、ダイヤがハァッとため息を吐き

止めようとした時だった。
「あれ？誰か電話鳴ってない？」
曜の言葉に全員が静まり返る。
シンとなると確かに誰かのスマフォに着信があったのだろう、着信音が鳴っている。
「私?!」
そう言うのはヨハネ。
カバンからスマフォを取り出し相手の名前を確認すると表情が少し変わる。
「誰？」
「いや・・・レンち～よ。」
「廉くん？」
「うん。出るわね」
相手の名前を聞く曜に対しヨハネは廉の名前を出し、電話を出る。
「もしもし・・・うん久しぶり。うん・・・うん」
電話に出たヨハネの表情が少し緩む。
久しぶりの声に嬉しいのか、ヨハネの表情に少し笑顔が見えると、他のメンバーはニヤニヤとヨハネを見る。
「うん。え?!」

驚いた顔を見せるヨハネに周りのメンバーたちも互いに顔を見合わせ何だろう?と小さい声で話す。
「わかった・・・うん。じゃあね」
少し話をして電話を切るヨハネ。
「善子ちゃんどうしたの?」
花丸がヨハネに質問をすると、ヨハネは花丸を見ながら話す。
「レンち～がね、試合に出るんだって」
「お～、凄いじゃん」
ヨハネの言葉に喜ぶのは果南。
だがこれには続きがある。
「それでね、今度の試合。私たちに見に来て欲しいんだって」
「・・・・」
「試合に見に来てって」
『エェェェ!?』

翌日、廉が彼女たちの所へ来た。
当然先日の事を聞くために呼び出したのもある。

「廉くんどう言う事？」
　質問をする果南。
　その質問に廉は頭をポリポリと掻きながら話す。
「今度の日曜日、秋季大会の県大会が行われるんです。それに皆に来てもらおうと思って」
「え？いいの？」
「いいも何も、皆がいなかったら俺は・・・多分野球してなかっただろうし。だから見てもらいたんだ。俺の姿を。」
　そう力強く話す廉。
　その彼の言葉に、彼女たちは拒否する理由はなかった。
「勿論だよレンち～！」
「私たちでよければ応援するよ！」
　千歌と曜が嬉しそうに話す。
　そして他のメンバーからも声をかけられる廉は嬉しそうに笑顔を見せる。
「よっちゃん」
「ヨハネよ・・・何？」
　最後に廉はヨハネの所へと向かう。

「応援してて ね」
「あ・・・うん」
笑顔を見せながら話す廉に顔を赤くしながら頷くヨハネ。
そんなヨハネに他のメンバーは茶化す。
「うゆ？何赤くなってるの～？」
「惚気ずらぁ～」
「ち、違うわよ!!」
茶化すルビィと花丸を追いかけ回すヨハネに笑う廉。
「じゃあ、俺は行くね。詳しい時間とかはまた連絡する」
「あら。もう行ってしまいますの？」
「はい。まだこれからも練習なんで」
「無理はなさらないでくださいね」
「勿論です♪もうあんな思いはしませんから」
ダイヤの言葉に笑顔で答える廉。
そして去ろうとする廉に、ヨハネが呼び止める。
「レンち～！」
「よっちゃん？」

「頑張りなさいよ?!」

「勿論♪」

互いに笑顔を見せる廉とヨハネ。

そして廉は皆に深くお辞儀をすると背を向け走り出して行った。

廉の新たな野球選手としての門出に、ヨハネ達が立ち会うことになったのであった。

次回へ続く。

第１０話：何よ、カッコいいじゃない

愛鷹広域公園野球場

沼津市内では一番大きな球場であり、野球のみならずサッカーやテニス等様々なスポーツが行える場所だ。

そして、この野球場にて廉が復活する。

「お～、広いね～」

「私初めて来た」

愛鷹球場のベンチ上のスタンドへと入る千歌たち。

予想以上の広さだったのか、キョロキョロと周りを見渡しながら感動する。

「え？あれＡｑｕａｒｓの？」

「ほんとだ！」

スタンドに応援に来ていた女子学生らが彼女たちを見ながらザワつき出す。

またグラウンドでも彼女たちの存在に気づいており同じようにざわついていた。

「おいおいアレＡｑｕａｒｓの子達じゃね!?」

「なんでいんだよ・・・」

「あぁ、橘の友人です」
『はぁ!?』
騒つく選手らに洸輝が指さしながら話すと、選手全員が廉を睨む。
「お前！部活来ない間に何してくれてんだ!!」
「裏山けしからん!!」
「紹介しろ！」
「俺果南ちゃん推しなんだよぉ!!」
「僕はルビィちゃん神推しだ!!」
それぞれ怒りというか、思いを廉にぶつける。
しかし廉は表情変える事なく口を開く。
「さぁ試合に集中しましょう～」
『おい無視すんな!!』
飄々としながら話す廉にツッコミを入れる選手たち。
その後も廉に対し憎悪の思いをぶつけていたが、試合開始が近くなると彼らの表情は一変し円陣を組む。
「詳しくは試合後に聞くとして」
「え？話しませんよ？」

「ウルサイ黙れ・・・。さ、気を取り直して。いよいよ秋大会だけど、この試合は橘の復帰戦でもある。だから今日は橘のために勝つぞ！」
『おぉ!!』
「みんな・・・」
声出しをした選手の思いは全員が同じだろう。
自分が戻ることを待っていてくれた彼らに、廉は今日は精一杯頑張ろうと誓う。
「よし!!行くぞ!!」
『おぉ～!!』
ベンチ前で声を出しホームへ向けて駆け出し整列をする。
審判の号令とともに互いに挨拶を交わすと守備に着く為選手らがグラウンドへと散らばり攻撃を行う選手たちはベンチへと戻る。
《1番・・・ショート・・・橘君》
先攻は聖秀。
場内アナウンスで廉の名前が呼ばれると、廉はゆっくりと打席へと向かう。
「あ！レンち～だ！レンち～♩」
「廉君～♩」
千歌が真っ先に廉に気づき応援の声を飛ばすと、曜が続き他の子達も声をだし応援す

る。
　黄色い声援を受ける廉は気恥ずかしそうに打席へと向かう。
「橘!!今日のお前は好きにやっていいぞ!!カッコいいとこ見せてやれ!」
「そうだぞぉ!裏山けしからん!」
「あはは・・・はぁ」
　ベンチからのゲキに苦笑いを見せながら打席へと入る廉。
　対戦相手のピッチャーは廉を見る。
（橘廉、本当に帰って来たのか。しかもショートで・・・でも本当に怪我から治ったのか？）
　警戒心を強める相手投手の初球は外に外れる変化球を投じ、廉はこれを見送る。
「ボール!」
　審判はボールの判定。
　廉はバットを構え直し相手投手を見る。
「ストライク!!」
（これは入る・・・）
　慎重に攻めて行く投手に対し廉も見ていく。
　そしてツーストライクツーボールとなった５球目だった。

カキィイン・・・

投じられた5球目は外への変化球。

このボールを廉は逆らわず合わせるように打ちに行くと打球は鋭い当たりを放ち一二塁間を抜けて行くライト前のヒットとなった。

「お～・・・ヒット?」

「うんヒット」

千歌が確認すると果南が頷く。

「打ったずらぁ」

「良く分からなかったけど・・・すごい事なのよね?」

「うゆ・・・」

花丸やヨハネ、ルビィもヒットを打ったことは分かるものの具体的な事は良く分からないようで反応も様々だ。

「でもレンち～の足の速さって、どこで生かされるかしら?」

「あ～それは」

ヨハネのふとした疑問に果南が答えようとした時、球場ないからワッと歓声が上がる。

ヨハネがグラウンドの方を見ると、廉がスタートを切っており二塁へと悠々到達して

いたのだった。
「あれ。盗塁っていうの。足の速い選手の醍醐味ってやつかな？」
「あっという間に到達したずらぁ～」
「速いぃ～」
　花丸やルビィが驚く中、ヨハネは二塁にいる廉を見て惚けていた。
　そんなヨハネを見ながらニヤニヤする花丸とルビィ。
「な、何よ!?」
「別にぃずら」
「うゆ♪」
「も～!!」
　ニヤニヤする２人に怒るヨハネだが、彼女は本気で怒ってはいなくむしろ何処か嬉しそうにも見えた。
「流石かなんレンくん」
「果南さんは、よくご存知なのですね？」
「まぁ家でお父さんとかと見たりするからねぇ、お父さん野球とかスポーツ中継見るの好きだし。」
　ダイヤの問いに笑いながら答える果南。

だが果南は二塁上にいる廉を見ながら話を続ける。
「それに、凄い嬉しそうだったんだよ？〝あの沼津から甲子園のヒーローが出た！〟ってね。もう当時はお祭り騒ぎだよ～。うるさいのなんのってね」
苦笑いを見せながら話を続ける果南に他のメンバーは耳を傾ける。
「一度羽が折れて・・・今レン君は帰って来たんだよね。自分がいるべき場所に」
「いるべき場所・・・ですか」
「そ♩形がどうであれ、レン君は野球場の中にいるのが一番輝ける場所なんだよ。私たちがステージで輝いてるのと同じでね♩」
「かっこいいね」
果南の言葉に千歌が思わず言葉を零す。
おそらく彼女の本心であり自然と出て来た言葉であろう。
「かっこいいよね。レンち～・・・輝いてるよね♩」
「うん。私もそう思う。」
「私もよ千歌ちゃん」
千歌の言葉に曜と梨子が同調する。
もちろん、他のメンバーも同じ気持ちである。
「私たちも・・・輝きたい」

「うん」
「だね♪」
千歌の言葉に互いに顔を見合わせニコッと笑う曜と梨子を含めた三人。
「頑張れ、レンち～」
そう一言呟く千歌。
次の瞬間には、廉が再びスタートを切っており三塁目掛けて走っていた。
「セーフ!!」
「ナイスラン!!」
「良いぞ色男～!!」
ベンチから弄りも混じりながら檄が飛ぶ。
廉は気にもとめずにグッと右腕を上に挙げ檄に応える。
二盗、三盗と決めチャンスをグッと広げる。
キィイン・・・
「ライト!!」
打者が打ち上げたのはライトへのフライ。
定位置より若干浅い当たりだが、廉はスタートを切る準備をすると、ランナーコーチが話をする。

「いけるのか!?」
「いく!!」
「自信はあるんか!?」
「ある!!」
「・・・よし!」
廉の言葉に腹を括ったランナーコーチ。
ライトの選手がボールを捕球すると〝ゴー!〟と掛け声が響き、廉はホームめがけてスタートを切った。
「ふ、ざけるな!!」
ライトの選手がバックホームをする。
送球は一直線にキャッチャーのミットへと収まり、廉はキャッチャーのタッチを掻い潜るようにスライディングを決める。
あとは審判の判定に委ねられる。
(セーフ!)
(いやアウトだ!)
滑り込んだ廉とキャッチャーが主審を見る。
「・・・セーフ!セーフ!!」

「おっしゃあ!!」
主審の腕は横に広がるように動かされ、セーフの判定をした。
その瞬間、廉は飛び跳ねるように立ち上がり雄叫びを挙げていた。
球場の観客からも歓声が響く。
「セーフにした・・・」
「え?!今の凄いんだよね!?そうだよね!?」
「凄いことだと思うよ?多分・・・」
驚く果南に、訳が分からず隣の曜に確認する千歌に自信なさげに答える曜。
だが単純に点が入った事は分かった。
「何よ・・・レンち～・・・」
廉のタッチアップを見ていたヨハネは1人でつぶやき出し、隣の花丸とルビィがヨハネを見る。
「何よ、カッコいいじゃない」
「善子ちゃん・・・」
微笑みながら呟くヨハネ。
そんな彼女を見て、花丸もニコッと微笑むのであった。

次回へ続く。

１１話：互いの想い

初回の攻撃を終えて廉たちは守備へと向かう。
マウンドには工藤が上がり、廉はショートの守備位置へと向かう。
投球練習をしている工藤の後ろでファーストの選手からの転がされたボールを捕球し一塁へ投げる練習をする。
廉は一塁送球をしながらも、自分の肘の状態を確かめるように行っていた。
（大丈夫かな・・・）
投げ終えた後に肘を軽く捻ったりプラプラと振って見たりする廉。
軽い送球では痛みは無い。
問題は生きた打球を取り強い送球を投げる時だ。
「よし!!しまってくぞ!!」
『おぉ～!!』
キャッチャーの選手の掛け声で他の選手らが声を出す。
また廉も同じように声を出すと、一呼吸起き試合に集中する。
「ストライク!!」

「ナイボー!ナイボー!いい球だよ!」
工藤の投じた投球一球一球に声をかけて行く廉。
そしてその瞬間は直ぐにやってきた。
カキィィン・・・
「ショート!!廉いけ!!」
打球はショート廉への真正面の当たり。
その場面にスタンドのヨハネらが身を乗り出すように見つめる。
(レンち〜!!)
祈るように両手を握るヨハネ。
打球をさばいた廉は素早く右腕を振り一塁へと送球をした。
(!!)
「・・・アウト!!」
一塁へ投じられたボールは真っ直ぐ飛んで行きファーストミットへと収まった。
判定はアウトとなったが、工藤らチームメイトは廉の方を見る。
「廉!」
肘は大丈夫か?

痛みは無いか？
そんな思いが交差する工藤に対し、廉は動かず下を俯いていた。
「え？ダメなの？」
「まさか・・・」
ヨハネを始め彼女たちにも不安が広がる。
そして廉が顔を上げるとグッと右腕を挙げながら笑顔を見せる。
「ビックリさせんなよ・・・ナイスだ廉!!」
「おぉ～！俺は大丈夫!!」
廉から出た言葉に安堵感が広がる。
工藤はグラブを廉の方へと向けてニッと笑う。
「よかった・・・」
「よかったずらね喜子ちゃん」
「う、うん・・・・ってヨハネよ」
ヨハネからも安堵の表情を見せる。
その後の廉のプレーにヨハネを始め彼女たちは一喜一憂した。
守備でいいプレーを見せれば拍手をして喜ぶ。
そして攻撃では３―０とリードした６回。

廉の打棒が再び魅せる。
カキィィン・・・
廉の振り抜いたバット。
弾き返された打球は右中間を抜けていく。
快足を飛ばしながら一塁を蹴り二塁、そして二塁までも蹴り三塁へと向かっていく。
「おいおいマジかよ!?!!」
「イケイケ廉〜!!」
ベンチから声が飛び交う。
廉は三塁へと向かって行き足からのスライディングで三塁へと到達。
判定は余裕のセーフだった。
「セーフ!!」
「・・・よっしゃ」
ポンポンとユニフォームの汚れを落としながら立ち上がる廉。
今日この試合廉は3打数3安打と大活躍。
もはや彼の独壇場とも言えるだろう。
「今日の廉君凄いね〜」
彼の活躍に驚く果南。

他の女子たちは良く分かってないらしく果南の言葉に首を傾げる。
「打席全てでヒットを打っているって事。滅多に出来ない事だよ？」
『へェ～』
「イマイチピンときてないね～？」
「えへへ。いまいち～」
果南の言葉に隣の千歌がヘラっと笑いながら答える。
「まぁでも。ここまで頑張れるのはさ。見て欲しい人がいるからじゃあ無いかなぁ？」
果南がニヤニヤと笑いながらヨハネを見る。
その彼女の視線にヨハネはドキッとしながら頬を少し赤らめながら話す。
「な、何よぉ!?」
「別にぃ～？」
「顔赤いずら♪」
「ずらまるまで・・・もぉ～!!」
怒るヨハネにキャッキャと笑う彼女たち。
だがその中に一人だけ、難しい顔をしている人物がいた。
「ダイヤ？どうしたの？」
「え？いえ、大丈夫ですわ？」

「ん～？廉君の活躍が嬉しく無いの～？
「いいえ鞠莉さん。勿論嬉しいですわよ？ただ・・・」
『ただ？』
ダイヤの表情や言葉に首を傾げる果南と鞠莉。
二人の質問に、ダイヤは少し黙るもゆっくりと口を開き二人だけに聞こえるように小さな声で話したのであった。

「ゲームセット!!」
「よっしゃああ!!」
「勝った～!!」
試合が終了した。
結果は廉たちの聖秀学園が５―０で勝利を収めたのである。
最後の打者を打ち取りマウンド上に選手らが集まり喜びを分かち合っている。
廉もその中に加わり喜びを爆発させている。
「おかえり・・・廉」
「おかえり橘」

「廉、おかえり！」
「ａｑｕａｓの誰か紹介して？あ、ついでにおかえり！」
「え？最後の何？」
選手たちが廉に向かって〝おかえり〟と言葉をかけてくれた。
その彼らに廉はたまらなく嬉しく、目には涙がにじんでいた。
「あれ？泣いてる？」
「な、泣いてない！」
「泣いてるぅ～？」
「うるさい!!」
ニヤニヤしながら話してくる工藤に対し、廉はグイッと涙を拭う。
そして最後は笑顔で彼らを見るのであった。
「よし挨拶するぞ」
試合が終わるとスタンドの方へと向かい応援してくれた人たちに頭を下げ挨拶をする。
挨拶が終わり頭を上げると廉はすぐにヨハネを見た。
すぐに目が合うヨハネと廉。
二人は長く目が合うと互いにニコッと微笑むのであった。

（レンち～。。。）
（よっちゃん。。。）
もう言葉はいらない二人の間。
すでに互いは惹かれ合っているのは間違い無い。
廉はベンチに戻り際にヨハネに手を小さく振ると、ヨハネも同じように手を振り返す。
（手を振り返してくれた）
（手を振ってくれた。。。レンち～、また色々話聞かせてね。私も話したい事あるのよ。。。言えるかな？好きって・・・）
想いを伝えよう。
そう心に思うヨハネであった。
そして廉は廉でヨハネを見ながら微笑みを見せるも、彼の心のどこかに想いがある。
（よっちゃん。俺は・・・どうしたらいいのかな？）

そして数日が経ったある日。

「えっと・・・お邪魔します？」

「いらっしゃいレンち～」
「えっと・・・？」
廉は千歌に呼び出されていた。
千歌の住んでいる旅館へと行き千歌の部屋へと連れてこられた廉。
部屋には千歌の他に５人のメンバーがいた。
「え？なんです？」
いきなりの事だった為、思考が追いついてこれない廉。
するとダイヤが一番前に出てくると口を開く。
「廉さんにお願いがあって呼ばせてもらいました」
「お願い？」
「はい。とてもとても辛いお願いです・・・」
目を落としながら話すダイヤに、廉の表情は一瞬で強張った。
これから始まる話に彼は何を思うのか・・・・

次回へ続く。